

絶滅危惧野球～消え続ける野球少年たち～

大阪経済大学 田島ゼミナール

○紙谷 貴比呂 濱西 将成 八木 茉紘 河林 幸丸
竹川 真晴 赤山 知幹 花崎 つぐみ

はじめに

近年、少年、子ども層の「野球離れ」が指摘されている。地域少年のスポーツ団体であるスポーツ少年団の軟式野球の男子団員数は、2009年に17万3978人、翌年に16万8512人と減少に転じ、2015年には11万8064人と2010年から30%も減少している。

また、日本中学校体育連盟(中体連)の軟式野球部の部員数も、2009年には30万7053人だったが、2015年には20万2470人と30.3%も減少している。少子化による子どもの減少も理由のひとつに考えられるが、例えば2015年の子どもの人口1617万人(0歳から14歳)に対して2010年の子どもの人口は1684万人であり、減少率で言うと4%である。明らかに少子化の影響だけではなく、子どもたちが野球を選択しなくなっている現状が指摘できる。

(人)

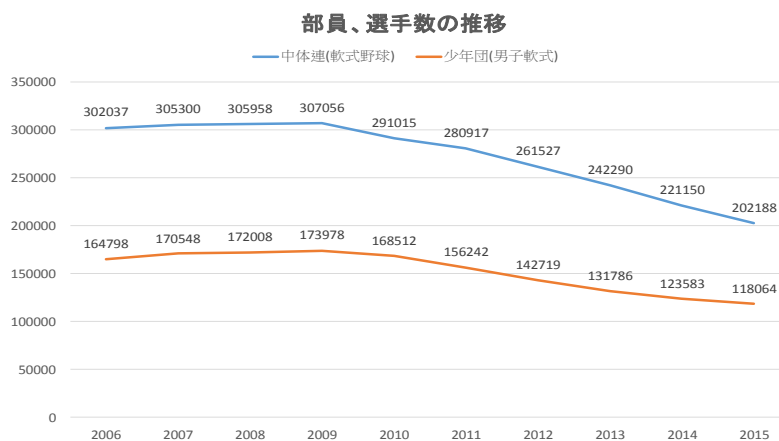


図 1 少年団、中体連の選手数の推移 (年)

1. 問題の所在

少年野球の動向に詳しい年中夢球(2018)は、野球人口の減少の原因として(1)スポーツの多様化 (2)親の負担 (3)野球というスポーツへの厳しい目 (4)野球をする環境が悪化していると指摘する。(1)のスポーツの多様化の波を私たちは変えることはできないが、(2)(3)(4)の3点は、私たち自らの手でより良くしていくことが可能だと考えた。そこで、本企画では以上

の3点について、現在の問題を解決できる方策を提案していく。この企画を通して、日本の最も人気のあるスポーツのひとつである野球が、誰もが親しむことのできるものであり、より良いイメージで受け入れられる存在でいられることを目指している。

2. 解決策1 幼児への普及方策 ← 問題の所在(4)野球をする環境の改良に対応

《問題の把握》

野球をする環境を考えると、施設、指導者、機会の問題、いろいろなアプローチが考えられる。その中でも今回は、「野球に触れる機会」に着目した。

表1 学習指導要領の変遷

昭和22年	昭和24年	昭和28年	昭和33年	昭和43年	昭和52年	平成元年	平成10年	平成20年	平成29年 8月
1年生 ・遊戯・球技 ・球送り ・球入れ	・ボール遊び ・遊びかけ玉入れ ・手渡し球送り ・球受け ・自由ドッジボール ・ティーチャーボール (その他)	・ボール遊び ・ドッジボール ・キックボール ・遊び	・手渡し球送り ・遊びかけ玉入れ ・たらい ・別荘ボール作り	・ドッジボール ・ボール作り遊び	1年生 ・ゲームボール遊び ・ボール投げ遊び ・ボール作り遊び 2年生 ・ボール投げ遊び ・ボール作り遊び	・ゲームボール遊び ・ドッジボール ・ボール作りゲーム		・ゲーム ・ボール遊び ・ボール投げ ・ボール作り ・ボールゲーム	・ゲーム ・ボール遊び ・ボール投げ ・ボール作り ・ボールゲーム
2年生			・投げ渡し球送り ・投げ渡しボール ・ボール投げ ・別荘ボール作り	・ドッジボール ・ボール作り遊び	3年生 ・ゲーム ・ドッジボール ・ラインサッカー 4年生 ・ゲーム ・ドッジボール ・ラインサッカー	・ゲーム ・ポトボール ・ラインサッカー ・ハンドベースボール	現行 ・ポトボール ・ラインサッカー ・ハンドベースボール	・ゲーム ・バスケットボール型ゲーム ・サッカー型ゲーム ・ベースボール型ゲーム	・ベースボール型ゲーム (ア) ボールを蹴る、打つ等により攻撃をしたり、捕る、投げる等により守備をしたりして、攻守を交代するゲームをする。 ○手やラケット、バット等で打ったり、止まっているボールを打ったりするゲーム
3年生 ・遊戯・球技 ・フットベースボール ・ドッジボール ・別荘フットボール	・ボール遊び ・方形ドッジボール ・フットベースボール ・ロングベースボール ・コーナーボール ・フィールドボール (その他)	・ボール運動 ・ドッジボール ・ハンドベースボール ・フットベースボール ・コーナーボール	・方形ドッジボール ・ハンドベースボール ・フットベースボール ・ラインサッカー	・ドッジボール ・エンドボール ・ラインサッカー	5年生 ・ボール運動 ・バスケットボール ・サッカー	・ボール運動 ・バスケットボール ・サッカー (ソフトボールも加えて可)	改訂案 ・バスケットボール型 ・サッカー型 ・ベースボール型のゲーム対応 (サッカー、バスケットボールの3つのゲームに限らず他種のもの) の実態に応じて、種々な運動を取り上げることが可能とする。	・ゲーム ・バスケットボール型ゲーム ・サッカー型ゲーム ・ベースボール型ゲーム	・ベースボール型 (ア) 止まったボールや蹴り投げられたボールを打ったりして攻守交代が繰り返されるように機能化されたゲームをする。 (イ) 得点を取るために出塁と進塁ができ、チームとして守備の態勢をとってアタックにする動きができるようになる。 (例) ティーボール、ソフトボール
4年生			・ポトボール ・ハンドベースボール ・フットベースボール ・ラインサッカー	・ポトボール ・サッカー ・ハンドベースボール	6年生 ・ボール運動 ・バスケットボール ・サッカー		・ボール運動 ・バスケットボール ・サッカー	・ゲーム ・バスケットボール型ゲーム ・サッカー型ゲーム ・ベースボール型ゲーム (ソフトボール、ティーボール)	
5年生 ・遊戯・球技 ・ポトボール ・ソフトボール ・フットボール ・フットボール ・ソフトボール	・ボール運動 ・ソフトボール ・ポトボール ・エンドボール ・ソフトボール ・ネットボール ・蹴りボール (その他)	・ボール運動 ・バスケットボール型 ・パレーボール型 ・ベースボール型 ・サッカー型	・ポトボール ・ハンドベースボール ・蹴りサッカー	・ポトボール ・サッカー ・ソフトボール				・ゲーム ・バスケットボール型ゲーム ・サッカー型ゲーム ・ベースボール型ゲーム (ソフトボール、ティーボール)	
6年生 ・フットボール			・ポトボール ・ソフトボール ・蹴りサッカー	・ポトボール ・サッカー ・ソフトボール					

スポーツに触れる機会を考えると、意外と盲点なのが「体育の授業」の重要性ではないかと、私たちは考えた。体育の授業であれば、日本中の小中学生が一度はその種目（ここではベースボール型）に触れる機会を持つ。その量的な意味は大きいし、将来野球やソフトボールをプレーしなくとも、ルールや面白さを経験する機会を持つことができる。

表1は、体育の授業でどのような種目を行うか、各学年でどのような内容を扱うかをまとめた表である。注目したいのは、ベースボール型の種目が昭和52年の「学習指導要領」から外されている点だ。つまり、昭和52年からのおよそ10年間は日本中のどこの学校でも、ベースボール型を学ぶ機会がなくなってしまうことを意味する。この空白の10年間は、野球やソフトボールの普及においても、非常に大きな空白期間であったと推測される。

《解決策の提案1》 小学校へ再びベースボール型種目を導入する！【実施済】

そこで提案の1つめは、学習指導要領から外されたベースボール型を再度導入しようとする取り組みである。ベースボール型の種目が、体育の授業から除外された理由として、(1)試合時間が長くなる問題 (2)プレー機会が少ない問題 (3)用具の危険性の問題が指摘されて

いた。NP0 法人日本ティーボール協会（1993 年発足）は、以上の問題に対して ア. 投手のいないティーボールというゲームの考案することで、3~4 イニングが 45 分の授業で収まることを提示した。またティーボールでは イ. 全員攻撃制というルールで 1 イニングに全員が打席に立ち、何点得点できるかを競うことで、均等な打撃機会を確保した。さらに危険性に関しては ウ. ウレタン製の用具（ボール、バットの開発）、ダブルベースの導入など大きな事故を防ぐだけでなく、初心者にもやさしい道具を開発した。

以上の取り組みを通して、平成 10 年度～学習指導要領にベースボール型が記されることになった。今後は、より体育授業で行われるように教員への指導方法の周知が課題だ。

《解決策の提案 2》 幼児がベースボール型種目に触れる機会をつくる！【一部実施済】

日本ティーボール協会の努力もあり、解決策の提案 1 についてはすでに実施され、学習指導要領に再導入されるなど、成果をあげている。しかし、「はじめに」でも触れたとおり、野球の少年層の減少に歯止めをかけることはできていない。私たちは、その理由について、ティーボールが体育の授業で行われる小学校低学年の頃には、すでに中心的に取り組む種目を子どもたちは決めているのではないかと考えた。

実際に笹川スポーツ財団による「全国調査からみる子どもの運動・スポーツの現状と課題」（2018）では、サッカーが未就学児や小学 1 年の実施したスポーツに入っているにも関わらず、野球は見られない。つまり、普及のためには小学生より以前の段階で取り組むことが重要なのではないだろうか。この点についても、日本ティーボール協会は幼稚園の体育を指導する企業と連携することで、幼稚園の体育授業でティーボールを導入していく取り組みを行っている。私たちは、その取り組みがより成果を上げるためのプログラム開発を開発し、当日発表をしたいと考えている。

3. 解決策 2-1 高校野球を改革!?する ← 問題の所在(3) 野球への厳しい目を変える

もう 1 点、変えることができる問題として、野球のイメージを変えるというアプローチがある。2018 年、夏の高校野球大会は第 100 回を迎え、2 週間の開催期間のうちに甲子園球場には 100 万人以上の観客が訪れるなど、私たちの野球のイメージを強く規定する大きな存在だと考える。そこで、高校野球で指摘される課題を解決していくことで、野球に向けられた少しマイナスのイメージをプラスに変えることを目指したいと考えた。

《問題の把握》

第 100 回の夏の高校野球大会では、金足農業の吉田投手の活躍もあり、例年以上の盛り上がりを見せた。一方で、将来を期待される高校生のケガの問題も多くの識者から指摘された。

《解決策の提案 1》 球数制限を実施する

健康面に着目し、特に投球問題について考えた。毎年投球制限を設けるべきではないかと議論されており、今年の甲子園でもこの問題が出てきた。

エースが完投した、1人で投げきったなどが新聞では取り上げられているが、本当に投球数を考えずに投げきることがいいことなのかを考えた。故障してしまうリスクを抱えながら投げきることより、選手の未来のために投球制限を設けるべきだと私たちは考える。

そこで、PAP(pitcher abuse point)やU18のアジア大会のルールを参考に最大105球を設定し、最大まで投げた場合は4日間の休息を義務付けることを提案する。

しかし現状の試合日程のままでは今大会活躍した金足農業高校のようにエースが1人しかいない公立校が勝ち上がることができない、といった問題が出てくる。この問題を解決するために、高校サッカーが実施しているプレミアリーグのような1年を通して優勝を決める仕組みを取り入れるべきだと考えた。15日間という短い期間で1回戦から優勝を決めるのではなく、秋で各都道府県の代表を決め、春に地域のリーグ戦を行い、夏にリーグ戦で勝ち上がった各上位2チームが甲子園でトーナメントを行うことで、投球制限を設けても平等にどのチームにも優勝の可能性を与えることができるのではないかと考えた。また、試合数を増やすことで試合の質も上がり、競技レベルの向上も期待できると考える。

《解決策の提案2》 球数制限によって派生する問題を解決する

球数制限に関する議論は多く行われるが、その実施によって多くの反対意見がある。

例) 金足農の秋本コーチ「球数制限には反対です。公立校で3人も4人も継投できる投手を確保するのは現実的に難しい。導入されれば、今大会のウチのような躍進は極めて難しい。」

例) 日大三の三木部長「制限を設けるのは反対です。高校野球は教育の一環。投球制限が設けられれば、埋没してしまう才能もあるのでは。タフな選手を育てていきたい。」

感動を生まない、タフな選手が育たない、公立高校が活躍できなくなる。これらの指摘に対して、私たちは (1)より安全・健康に (2)より高いレベルの試合を増やす という2つの視点で解決策を提案する。

4. 解決策 2-2 高校野球を改革！？する ← 問題の所在(2)親の負担を含めた経済問題

これまで述べてきたような課題を解決するためには、実行のための資金は欠かせない。現在、高校野球大会は、多くのテレビ視聴者や観戦客がいる。その注目度を活用して、今後は収益化を図ることが、改革を実現するための手段として必要だと考える。

本企画では、放映権収入とスポンサー収入の実現可能性について検討をしていきたいと考えている。

主な参考文献

広尾 晃 『野球崩壊 深刻化する「野球離れ」を食い止める！』 イースト・プレス 2016年
日本ティールボール協会 HP (www.teeball.com)2018年10月3日最終閲覧日